

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	井 上 快
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論 文 題 目			
<p style="text-align: center;">藩儒の教育活動とその継承 —吉村家三代を中心に—</p>			
論文審査担当者			
主 査	教 授	鈴 木	理 恵
審査委員	教 授	丸 山	恭 司
審査委員	教 授	曾余田	浩 史
審査委員	教 授	中 山	富 廣（文学研究科）
審査委員	教 授	有 馬	卓 也（文学研究科）
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、藩儒吉村家を対象として、その教育活動—講義や会読といった学問教授、塾生が学問を行うための支援—の実態について、受け手との関係という観点から解明することを目的としたものである。吉村秋陽とその養子斐山は、江戸後期に広島藩家老の三原浅野家に藩儒として仕え、講学所朝陽館等とともに家塾咬菜塾で教授した。明治時代になると、斐山の子頭は広島県尋常師範学校の教員として奉職したことから、江戸時代における吉村家の教育活動が明治時代に継承された様相を明らかにすることも本研究の目的に加えられている。</p> <p>本論文は、序章と終章のほかに5章の本論からなる。序章では、先行研究が整理され、問題の所在、対象史料や研究方法について説明がなされた。</p> <p>第1章「『読書人』育成を目指した学問講究—塾生の政治志向と向き合う—」では、秋陽の『孟子』の講義録を史料として、朝陽館と咬菜塾での講義を詳らかにしたうえで、その比較に基づいて咬菜塾における教育活動の特徴を指摘した。庶民層が多かった咬菜塾では、語句レベルまで踏み込んだ解説がなされ、登場人物の発言の真意を探るといった、『孟子』本文のコンテクストの解明に主眼を置いた講義がなされた。これについて、庶民までも政治的活動に走る幕末期状況を憂慮した秋陽が、政治的な議論から距離を置いてひたすら学問講究に取り組む「読書人」の育成を目指したための教育活動であったと意味づけた。</p> <p>第2章「塾生の多様化に伴う教育活動の変容—多様な学問欲求と向き合う—」では、咬菜塾の教授内容について、塾生の出自が安政年間以降に多様化したことに伴い、それまでの経書中心から歴史書を取り入れたものへと変化したことを指摘した。経学者を自負する秋陽ではあったが、自身の専門にこだわらずに、塾生の関心に沿って教育活動を変容させていたことが明らかにされた。</p> <p>第3章「塾生に対する支援—塾生の学習環境と向き合う—」では、秋陽と斐山が、咬菜塾の塾生が退塾したのちも、書肆からの書籍購入の取り次ぎや講義の提供などのかたちで学習支援を継続したことを指摘した。「読書人」育成を目指した吉村家が、門人の学習環境の悪化に対する措置として教育活動をおこなっていたことが明らかにされた。</p>			

第4章「明治前期における塾の展開—時代に即した学問欲求と向き合う—」では、咬菜塾で師範学校入学希望者を多く受け入れるに伴い歴史書の学習がますます進んだことを、斐山が、「読書人」育成のために塾生の学問欲求を尊重した結果であると意味づけた。

第5章「師範学校への継承—生徒の将来と向き合う—」では、明治前期の彰の『論語』の講義録を史料として、師範学校と留正書院（旧咬菜塾）の講義を比較したうえで、師範学校での教育活動の特徴を指摘した。師範学校では、吉村家の家学を継続しながらも、生徒にとって負担の少ない講義がなされた。これは、小学校教員を目指す生徒に対応して、彰が工夫したものであったとする。

終章では、本論文を総括し、研究の成果と課題が示された。成果として挙げられたのは次の3点である。第一に、藩儒の教育活動について、身分制社会の枠組みを超えず学問に没頭する「読書人」の育成を目指した実態を明らかにした点である。第二に、家塾の特質を、藩儒が塾生の政治志向や学問欲求と向き合うなかで、教育者としての自己形成をおこなう場であったことに見出した点である。第三に、藩儒の近世の教育活動が家業として近代に継承された様相を明らかにした点である。

本論文の特徴と意義は以下の3点にまとめられる。これらは同時に、本論文を評価できる点でもあり、今後のさらなる発展が期待できる点でもある。

第一に、藩儒の教育活動を講義録や日記などの史料に即して実証的に明らかにした点にある。18世紀末の幕府による教学システムの改革を機に、諸藩で藩校設立が相次ぎ、藩校で教育を担う藩儒という存在が全国的に増加した。これまで、藩儒に関する研究は思想史の領域で蓄積されてきたものの、その教育者としての側面が教育史研究で本格的に取り上げられることはなかった。本論文は、吉村家という事例を通して、藩儒の教育活動の実態とその特徴を明らかにした。

第二に、藩儒の教育活動を「教え」の観点から解明した点にある。従来の教育史研究では、江戸時代は「学び」の時代と捉えられ、学習者の主体性に注目が集まってきた。本論文においては、研究の視点を、学習者の「学び」から、それを支えた藩儒の「教え」へと転換することによって、江戸時代の学習社会をとらえなおすことを試みた。江戸後期は人材育成を意味する「教育」が日本語として広がりをもせたことから、本論文の「教え」や「教育活動」の観点は重要である。

第三に、江戸時代後期の教育活動が明治時代前期に継承されたことを実証的に明らかにした点にある。従来の教育史研究は、ともすれば、江戸時代と明治時代を断絶したものとみなしがちで、研究もそれぞれの時代で完結する傾向にあった。本論文は、江戸時代後期から明治時代前期までを研究対象とし、「藩儒の家」吉村家の継続的な営みとしての教育活動を検討することによって、藩儒の家塾での教育活動が師範学校での教育活動に継承されていた様相を具体的に描き出すことに成功した。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和4年2月8日